
神様の絵の具

蔡鷺娟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の絵の具

【Nコード】

N8097Z

【作者名】

蔡鷺娟

【あらすじ】

交通事故で恋人を失った高校生のアキ。悲しみにくれる彼女を見守る家族。ある朝、アキの目の前に翼を持った天使が現れた。それは、失った恋人と同じ姿をしていて……。

どうしようもないことや、逃げられない運命があつて、それでも心だけは自由だと、想うことだけは自由でありたいと、そう願って創作しました。震災の後で不愉快に思われる方もいらっしやるかもしれませんが、でも、想いが伝わればと願っております。

序

青年は空の中に立っていた。

それはちょうど、透明なガラスの板の上から、地上を見下ろしているような感覚。

けれども東京タワーの展望台もこんなに高くはなかったし、と青年 隼人は内心でこちる。足元もそうだが周りに一切掴まれるものもないことが、より一層の恐怖をあおって無意識に体が震えた。

茶色がかった短い髪を風に躍らせた隼人は、確かに立っているというのに足元には何も無いという不安感にやっとの思いで慣れ、この状況を作り出した隣に立つ小さな老人を横目で見た。

隼人の腰ぐらいまでの身長しかない、小柄な老人は、ふさふさの白髪と膝近くまで伸びた白いふわふわな髭がご自慢のようだ。絵本の世界から飛び出してきた小人のような様相であるが、笑い方が独特で、歯をむき出しにして「しっしっし」と笑う。だがどんな顔をしても可愛らしい部類に入ってしまう、そういう得なタイプだ。先ほど聞いたところによると、雲を司る神様なのだという。

この小さな神様と対面してから十分も経っていない。ものすごく気さくに声を掛けられ挨拶し、気がついたらこの見渡す限り遮るもののない空の上にいた。もし高所恐怖症だったら今頃気絶していただろうな、と隼人は全くどうでもいいことを考えたため息をつく。この世界に来てから今までの常識やらなにやらは全く通用しないことを痛感していたため、この突飛な状況を受け入れられるだけの余裕

はあった。当の老人は先ほどから懐を探り、何かを探しているようだ。

小さな空間をどれだけ整理できていないのか、しばらくごそごそしていたが、ようやく何か缶のようなものを引っ張り出した。自慢げに、にっ、と笑って見せてくれたその缶の中に入っていたのは、無色透明の液体。銀色の缶の底が見えるほどに透明であるが、水のようにさらりとはしておらず、とろっとしているようだ。

老人はにやりと笑って「これは特殊な絵の具なのじゃ」と言った。絵の具だ、と言われても、隼人の記憶ではこんな色の絵の具を使った覚えはない。透明ではただ紙が濡れるだけだと首を傾げる。

にやにやと笑ったままで、老人はおもむろに缶の中に指を入れ、その絵の具をすくった。皺だらけの指に光るその液体は、透明な蜂蜜のようにとろりと滴った。

一体それで何をするのだろう、と隼人が考えていると、老人は絵の具をつけたその指を、目の前の空に向かって横一文字に薙いだ。すると。

青い青い空の中に突如現れた白い雲。

それは老人の指が走るほうへ緩やかに伸びていく。隼人が声もなく目を瞬かせているのをちらりと見た老人は、楽しそうに笑いながら更に絵の具を指に乗せ、青を埋め尽くすように真っ白な雲を連れていく。

先ほどまで雲ひとつない、文句のない快晴だったはずの空に、今ひとつ、またひとつと生まれていく雲。隼人は無言のまま、老人を見つめた。雲を司る神なのだと、そういった老人を。

「しっしっし」

しわしわの顔にさらにしわを寄せて老人は笑った。体の揺れにあわせて、ご自慢の白い髭もふわふわと揺れる。

隼人は、もう一度雲に目をやった。

青空にまつすぐに伸びた白いライン。強い風に流されてその姿を徐々に変化させ、そして緩やかに空に溶けていく。

隼人は思わずため息をついた。

ああ、こんなふうに

こんなふうに雲を描くところを見せてあげられたらなあ

「行くか？ 見せに」

老人は、透明なその絵の具に濡れた指を動かしながら言った。目線は雲の方に投げられているが、間違いなく自分に向けて発せられた言葉に、隼人は瞬いた。

「え？ はい？」

まるで心を読まれたように向けられた突拍子もない言葉に正直理解が追いつかず、聞き返してしまう。

「行ってもいいぞ。おぬしが見せたい者のところへ。わしが許す」

そっけなくも優しい言葉に、隼人は瞳を瞬かせた。許す、とそんな言葉ひとつで行き来できるような世界ではない。それぐらいは隼人にも十分分かっていた。隼人が、隼人として存在していられるだけでも驚きで、幸せなことだと思っているのにまさか会いに行ってもいいだなんてどんな奇跡だろうか。ああ、でも。

目の前にいるこの小さな老人が“神”ならば。そんな奇跡も奇跡ではないのかもしれない。

隼人は見上げてくるキラキラした視線を受け止め微笑んだ。そして大きく息を吸って吐き出す。戸惑いを、打ち消すように。

会いにいける。きみに。

ただそれだけの想いを胸に、隼人は目を輝かせた。

「よろしくお願いします！」

「ではその前に修行じゃー。描けんことには見せられんぞー」

勢い良くお辞儀をして宣言した隼人に対し、非常に暢気な調子で語尾を延ばして言った老人のその口調に、隼人は思わずくすりと笑った。この羊のようなもこもこ老人、見た目以上にかわゆい。

「はい、頑張ります！」

若者らしい元気のよい返事に、小さな老人は元々細い目をさらに細めた。

序（後書き）

お話の骨格は数年前から、そしてお話の全体の流れが決まったのも3月11日の震災の前でした。人の生き死にを扱う題材で、正直戸惑いもありました。でもこんなファンタジーがあってもいいのではないかと私は思います。少し長くなりますが、最後までどうぞお付き合ってください。

いない。キミが。

どこにも、どこにも。

どうして、なの？

「アキ、ご飯できたよ」

縁側に座り込み、ぼーっと庭を眺めていたアキに、長兄のハルが声をかけた。

夏真っ盛りの八月、夕方の庭には大輪の向日葵がまるで黄色い壁のように一面に咲き誇っている。さわさわと大きな緑の葉を風に揺らし、その存在を声高に主張する。

ちょうど縁側が陰になるように造られた棚に、キウイと葡萄が旺盛につるを伸ばし、その大きな葉を元気よく広げる。緑のカーテンに遮られた太陽の光は、夕方なものもあってだいぶ柔らかい。

鮮やかな水色のワンピースを纏い、ウェーブのかかった黒髪を背中に流したアキは、蝉の耳障りな鳴き声すら相殺する静かさを周囲に放ち、まるで一幅の画のようにそこに存在していた。

大学生である長男のハルは、学生の特権である夏休みをフルに利用して、今一番の心配の種であるただひとりの妹、アキにかかりつきりであった。体力を生かしたアルバイトに精を出しつつ、やらなくてはならない課題を適当に片付け、空いた時間のすべてでアキの世話を焼く。健康で体力が有り余るほどでよかつたと、今ほど感じたことはない。時間は買いたいほどに欲しいが、全ては大切な妹のため。

だが当のアキは、呼びかけられたことにさえ気付かぬ様子で、微動だにしない。呼吸しているのかすら疑わしいほど、風景に溶け込んだ無機質な姿。目線の先にあるのに、咲き誇る向日葵の鮮やかな黄色さえ映さない暗いアキの瞳に、ハルはその広い肩を落とし、小さくため息をついた。

「アキ、ご飯だよ」

今度は肩にそつと手をやって呼びかける。アキはびくりと体を震わせはつと弾かれる様に顔を上げ、ハルを見た。そして瞬時に花の様な笑顔で笑った。

「わ、ハル兄にい、びっくりした。呼んでくれれば行ったのに」

明らかに驚いたのにそれを必死で誤魔化すアキの様子に、ハルは痛々しさを感じその頭を撫でた。

「呼んだよ。大声でな。……ほら、行くよ」

「はい」

アキは元気に返事をしてすぐに立ち上がった。しかしその瞬間にふらりとよろめいた。慌ててすぐ傍にいたハルにしがみついて、バツが悪そうに微笑んで言う。

「ずっと座ってたからかなあ？ はは。……今日の夕飯なあに？」

アキの足元がふらついたのを見逃さなかったハルは咄嗟にアキの身体を支えた。最近はいつものころだったから、立ちくらみを想定していつも注意を欠かさない。ハルはやっぱり今日も、と思っで一瞬険しい表情をしたが、すぐに笑顔に戻って言った。

「ナツ特製の天ぷらにそうめんだ。今日みたいな暑い日には最適だろ？」

その言葉にアキはにっこり微笑んだ。

「うん、そうだね。早く行こう！」

「……アキ」

「ん？ 何、ハル兄？」

自分の腕から空気のようにするりと抜け出して、ひとりで歩き出したアキの背に、ハルは思わず呼びかけた。一瞬迷ったような表情の後で、ハルは短く刈った頭を掻いて笑った。

「いんや、何でもない。さ、飯だ飯だ！」

アキの背中に手を添えてそつと促し、家族の待つ居間に向かった。

日向家では、家事は分担制である。掃除、洗濯、食事……。全てをハル、ナツ、アキ、フユの四人兄弟と、父親である栄さかえの五人で分担して行なっている。

今日の食事当番は次男のナツで、後片付けは長男のハルの担当であつた。

次男のナツはアキと双子として生を受けた高校二年生で、地元の男子校へ通っている。今はやはり夏休み中で、時間を作っては短期アルバイトに勤しむ勤労学生だ。

家族そろつて囲んだ夕食の後で、がちがちと音を立てて皿を洗うハルの元へ、ナツは少し長めに伸ばした明るめの髪をゴムで縛りながら近づいた。

「アキは、大丈夫なのか？ 今晚もあんま食べてなかつたし……。栄養失調になつたりはしないだろうな……」

抑え目の声で心配そうにハルに向かって問うたナツは、泡だらけになつた皿を水で流すべく、水道の蛇口をひねる。ナツは普段から多くの家事をこなしている為、本来ハルの当番を手伝つたりはしない。だがわざわざ自分の隣にやってきた理由をわかっているハルは、何故手伝うのかなどとは聞かず、スポンジを動かしながらナツの質問に答えた。

「栄養は……なんとか足りている……と思う。野菜ジュースやらサブリヤらで……。だが絶対的にカロリーが足りてない。大分痩せた。

さつきも立ちくらみを起こしたみたいだ」

ざばざばと放出した水を惜しげもなく使って泡を流していくナツは、重苦しいため息をついた。顔を下げた拍子に落ちてきた前髪を邪魔そうに首を振って払う。その間も顰めた眉は額の中心で細かい縦皺を刻んでいて、不満と悲しみが同居しているような表情だった。

「もう一ヶ月だぞ……。どうしたらいいんだ？俺たち兄弟じゃ、アキの心は癒してやれないのかな……」

ナツの独り言のような問いに、ハルも答えを探しあぐねて黙っていた。

考え付く方法は何でも試した。ただアキの為、アキが再び笑ってくれるようにと願い、動き続けてきた。だがアキはその本来の笑顔も、瞳の輝きも無くしたまま、もうひと月が経ってしまっていた。

「アキのあの顔見るとさ、俺、いつそ泣いていいよって抱きしめてやりたくなるんだよな……」

うめく様に言ったナツに、ハルも同意を示した。

「ああ、そうだな……。少しでも気持ちを吐き出してくれれば……」

泡だらけのスポンジを握り締めて、それっきり沈黙してしまったハルの隣で、ナツは呟く。

「……馬鹿やるー、隼人……」

『本当は、お前の仕事だろう』と続けて小さく呟かれた言葉を、ハルは聞こえない振りするしかできなかった。

重苦しい空気が立ち込める、男ふたりが皿洗いをする台所の隣。障子を挟んで居間では未っ子のフユと父の栄がテレビを見ていた。ゴールデンタイムのバラエティで、画面の中ではたくさんの人が賑やかにおしゃべりしている。

大人しくテレビを見ているのかと思いきや、身体だけテレビの方向に向けて実は、遅しい長兄と細身の次兄のふたつの背中を静かに見つめていたフユは、瞬きをひとつして、音を立てずに立ち上がった。

軽快な足音で去っていく末の息子を、同じく居間にいた父、栄は無言で見送った。テーブルに肩肘をつき、フユと同じように身体はテレビの方向に向けたまま、栄はちらりと居間の隅にある仏壇に目をやって、そしてまたテレビに視線を戻した。……画面の中で笑い転げる人々を、見つめるその目は冷めている。焦点もあっていない。

音は、テレビから聞こえる意味のない響きだけ。

家族が賑やかに喋り、明るく楽しかった日向家の面影は、今は、ない。

風呂から上がったアキは、自室のベッドに腰掛け、電気もつけない。

いままの暗がり、何をすることもなく座っていた。最近はどうしてベッドに座り、いつのまにか意識が途切れて眠るのを待っている。別の場所において眠ってしまえば、家族に迷惑がかかることを学んだのだ。

ここ二週間ほど夢遊病になったかのように、変な場所で目覚めることが多く、縁側で座ったままだったり、玄関の外で意識を取り戻したこともあった。一度はすっかり水に戻った風呂の中で目覚め、朝起きてきてそこに居合わせたナツが、真っ青になって叫び、大騒ぎになってしまった。それ以来、こうしてベッドの上にいれば、いつ眠ってしまっても目覚めたときはベッドの上であり、家族に要らぬ心配を掛けなくてすむ、とアキは思っていた。体が睡眠を求めるギリギリまで目を開けていて、気がついた時には眠っていた、というのが一番楽なのだ。無理矢理寝ようとしても、睡魔は襲ってこない。

ふと、見つめられている気がして顔を上げると、ドアのところ兄弟のフユが立ってこちらを伺っていた。フユは日向家の三男で未子、今年十一歳の小学校五年生だ。ナツと同じ少し明るめの、くるくるした髪に、母親譲りのくりつとした大きな瞳。まるで天使のような容貌は、ご近所のおばちゃんたちのアイドルと化している。アキは少し首を傾げ、そしてフユに向かって手招きをした。

「どしたの？ フユ。入っておいで？」

その言葉に、フユはとことこと近づいてきて、アキの座るベッドの端にちょこんと腰掛けた。

「アキちゃん、ぼくね……」

フユは言い出すなりそれっきり口ごもってしまい、もじもじしている。ものすごく可愛いが、それでは一体何が言いたいのか全くわからない。フユの柔らかな髪を撫でながら、アキは先を促した。

「フユ？ どうしたの？ 何か言いたいことがあるんでしょ？ 言っつてごらん？」

「う、うん……。あのね、ぼく……。ね。……。このあいだ、隼人兄ちゃんを見たんだよ。アキちゃんが座ってるえんがわのね、ひまわりの前に立ってね、アキちゃんのこと見てたの」

まだ幼い弟がもじもじと言った突拍子のない発言に、アキは目をみはる。言い難そうにしていた理由が分かった。幼くたってフユには分かっているのか。アキの顔が一気に歪む。

「……フユ。隼人兄ちゃんはもういないんだよ？ 一緒に見送ったでしょ？」

動揺して声が震えるのが分かる。フユの頭を撫でていた手も、油の切れたからくり人形のように、ぎこちなく彷徨う。だがフユはアキの動揺に気付かず、むしろ嬉しそうに話し出した。

「うん、アキちゃん言ってたよね。隼人兄ちゃんは、ママみたいに天国へ行ったんでしょ？ ママもね、時々会いに来てくれるんだよ。夢でね、会ったんだ」

フユの何の気ない言葉と無邪気さがアキに激しい衝撃と動揺を与える。胸が苦しくて、思わず「ひゅっ」と息を飲み込んだ。

……本当にそうならいい。幽霊だって夢だってなんだっていい。

もう一度会えるなら。

……だけでももう会えない。もうこんなにも純粋な子供じゃない。分かってている。……十分すぎるほど、分かっているのだ。

イライラが、言葉に棘を生やす。

「フユ、お姉ちゃんそういう冗談はキライよ。天国へ行った人には会えないの。……死んじゃった人には、二度と会えないんだよ」

自分の言葉に余計に傷ついて、胸がずきんと痛んだ。目の淵に溢れようとする涙を堪えるのに、のどが痛む。

上からポツリポツリと屋根に当たる雨の音が聞こえてきた。大粒の雨音。

いつもはやさしい姉が初めて見せる荒げた声と突き放すような態度に、フユはびくりと体を揺らし、アキから離れるように身を縮めた。

「……っ！ アキちゃん、ご、ごめんね……。ぼ、ぼく……」

弟の大きな瞳から涙が溢れるのを見て、アキははっとした。慌ててフユを慰めるも、甘やかして育ててしまったのか、末っ子の彼は昔から一度泣き出すとなかなか泣き止まない。

泣く少年と連動するかのように、降り出した雨はスコールのよう一気に本降りになり、屋根を叩く。

「フユ、ごめんね、フユは悪くないよ。お姉ちゃんが悪いんだよ、ごめんね……」

子供特有の少し高めの体温を感じながら、アキはその柔らかい体を抱きしめる。ざあざあと振り続ける雨の音に紛れながらひっそく、

としゃくりあげる小さな体をさすり、ごめんねを繰り返す。

心に、穴が開いている。

こんな風に、フユを怖がらせて泣かせたことなんてなかった。それ以上に、泣いているフユを見ても、動かない心。

ブラックホールのようにぽっかりと胸に開いた穴は、深く黒い闇の中で、何もかもを噛み砕き、飲み込み、沈ませ、全ての感覚を麻痺させる。痛みだけが、チクチクと刺すような、ジクジクと滲むような痛みだけが、執拗にアキを責め立てる。まだ、生きているのだと、体の存在を声高に主張する。

隼人

動くべき脳の大半はただひとつの思念に取り付かれるように停止している。

隼人

フユの柔らかな髪を撫でつつ、くちびるは想いのこもらない「ごめんね」を呟き続ける。さきほどは堪えられたはずの涙が、ぼろりと頬を伝っていく。

隼人

どうして

死んでしまったの？

薄れていく意識の片隅に、耳障りな雨音がずっと響いていた。

雨はキライ。

君とちよならした日のことを

思い出してしまっから

アキの恋人である隼人^{はやと}が死んだのは、大雨の降る日だった。

所用で少し遅くなった学校からの帰り道、まだ明るいつ夕方だったのに雨で視界が悪かったのが災いし、走ってきたトラックに跳ねられ、その身は宙を舞った。

道路に倒れた彼に駆け寄った通行人が、かすれる声で呟く彼の最期の言葉を確かに聞いた。

大量の出血さえ洗い流されていくような大雨のなか、彼はその場で意識を失い、二度と目覚めることはなかった。

間をおかず連絡を受けた日向家の面々は、すぐに病院に駆けつけた。そこにいたのは彼の両親と、氷のように冷たくなり、その瞼を閉じたままの隼人だった。トラックに跳ねられたものの、大きな外傷を残さなかった彼の顔は、ただそこで眠っているかのように安らかであった。

霊安室の入り口で立ち尽くしてしまつたアキを促して、横たわる隼人に近づいたハルとナツは、その死に顔に涙すら流せず、ひたすら呆然としていた。隼人の両親がすすり泣く声だけが、その場に響く音だった。普段は無邪気なフユも、そのただならぬ気配を読んだのであるう、神妙な顔をして父親の手を握っていた。

そして最悪の対面から数日、隼人とお別れの日がやってきた。黒と白で統一された空間に、一様に暗い顔をした人々が並ぶ。あ

あまりに早すぎる青年の旅立ちに、誰もがショックを隠しきれない。またその日は、何かの冗談のように、今にも雨の降り出しそうな嫌な天気であった。

法要が終わり、出棺の時となった。

霊安室での対面からショック状態のまま、食事もとらず、眠りもせず、一言も口をきかなかったアキの下へ、隼人の両親が近づいた。そして、通行人が確かに聞いたという息子の最期の一言を、アキに告げた。

>アキ、どうか幸せにく

その言葉を聞いた瞬間、アキは初めて涙を流した。まるで、凍り付いていた時間が溶けるように、みるみる零れ落ちる涙は、ようやくアキを人形から人へ戻した。と同時に、アキにこの逃れようのない現実を、決して認めたくない事実を否応なしに突きつけた。

隼人は死んだ。

そしてアキは泣き続けた。涙は枯れることを知らず、ただ、零れ続けた。

隼人が灰になって、煙突から立ち上がる煙が、空に消えていつてしまっても、ずっと。

アキ

誰かに呼ばれたような気がして、アキは眠りから覚めた。

瞼を上げると、南向きの窓の端にうつすらと光がほのめいている。夕べはフユを抱きしめたまま、眠ってしまったらしい。泣いたのをそのままにしてしまったせいで、がびがびするほおを撫でつつフユを見ると、フユは自分の腕の中で、くうくうと安らかな寝息を立てている。うっかり布団もかけずに寝てしまったが、夏だし、寒くて風邪を引くということもないだろう。

熟睡するフユを起こさないように、そつとベッドから抜け出たアキは、せっかくこんな時間に起きたのだから、朝日でも見ようと思いついた。ちょうど日の出の時刻のようだし、と立ち上がり、まずがびがびの顔を何とかしに、洗面所へと向かった。

南を向いている縁側の雨戸を開け、昨夜降った雨のせいでぬかるんだ庭を眺める。雨露に濡れた黄色の大輪の花は、昨日のような大降りの雨にもその太い茎を折ることはなかった。ゆっくりと顔を出した太陽が左手からその光を煌かせたとき、薄暗い中でも、存在を主張していた向日葵が、いっそうの輝きを増した。起きたばかりの目に、痛いくらいの黄色。朝焼けに染まる空は美しく、澄んだ空気は心地いい。

アキは朝の空気をめいっぱい肺に吸い込み、吐き出した。まだ少しかさつきの残るほおを撫でる。

緑の匂いがする、朝の清しい空気を吸い込んだら、なんだか気が楽になった。心が死んだように感じた昨夜が嘘のように、昨日のフユへの態度はあんまりだったと、素直に申し訳なく思った。

眩しいくらいに輝いている向日葵の黄色。そして大きく豊かに茂

る葉の緑。それは大好きな母の、大好きな花。毎年夏になると向日葵を見て喜ぶ母の姿を思い出し、アキは少し笑った。私にも会いに来てくれたらいいのに。そして……。

あまりに純粋な心を失わないフユが、羨ましく思えた。もし私がフユみたいに純粋に信じられたなら、私にも見えたのかもしれない。

縁側の柱に寄りかかるように手を置き、アキは向日葵に向かって話しかけた。フユが言っていたように、もし彼がそこで私を見ているなら、と。

「……ねえ、隼人。そこにいるなら私にも姿を見せてよ。ずるいよ、フユにだけ見えるなんて」

少し軽くなつたはずの心が、ただひとりの人を想つて感傷的に疼く。それを誤魔化すかのように小さく息を吸って吐いた。眼に痛い向日葵を見ていられずに、瞼を閉じる。零れそうになる涙を堪えて、何回か深呼吸した。泣きすぎて目の下が痛い。

ねえ、隼人、本当はわかっているんだよ。

家族のみんながずっと心配してくれていること、このままではないこと。大丈夫だと笑顔で振舞っていても、みんなには無理していることがばれていると、アキにだって分かっていた。

でもどうしたらいいの？ どこにいても何をしていても隼人を思い出してしまうのに、泣かずにはいられないのに、どうしたらいい？

目を閉じたまま、涙をこらえてじっとしているのが苦しくて、アキはいつのまにか呼吸を忘れるほど体を硬く緊張させていた。固く

む結んでいた唇を緩め、空気を大きく吸った。必死にこらえていた涙が零れないように上を向いたら、何とか零れずに済んだ。

隼人……

やり場のない、どうしようもない苦しい思いに胸を詰まらせたまま、アキは再びそっと目を開けた。少し荒い呼吸、少しだけ滲んだ視界。

新しい朝の、その差し込む朝日の中に、ふわりと舞う、羽。

突然舞い落ちてきた白い大きな羽に、アキは驚いて目を瞬いた。鳥かと思つて周囲を見回すと羽に遮られた視界の向こうに誰か人が立っているようだった。

「だれ？」

先ほどまで庭に誰もいなかったのに、と訝しげに呟いたアキは、声にならないほど掠れた呟きを零した。

「う……そ……」

大輪の向日葵の前に佇む、そのひと。体に沿ったすつきりしたラインの青い上着は膝の丈まであつて、黒いズボンに黒い布靴。ノースリーブの肩口からすらりと伸びた腕。やわらかく差し込む光を反射する茶色がかつた髪が風に揺れる。背中の中、真つ白な双翼がばさり

と、存在を主張するように大きく動いた。

「アキ」

揺れる向日葵を背に、白い翼がふわりと閉じる。

白く差し込む光の中、絵の中でしか見たことのない、その天使の姿をした人は、自分の名前を呼んだ。

「アキ」

再び呼ばれた名前に、ようやくアキは反応した。目の前に佇むその存在を、大きな瞳をさらに見開くようにして見つめる。

……失った恋人の、記憶に残るその声音。

「……アキ……？」

三度遠慮がちに囁かれた名前に、心臓がぎゅっと締め付けられる。瞳から大粒の涙がこぼれた。とても自然に、当たり前のように。震える体を抱きしめる。立っていられるのが不思議なくらいだ。

くちびるが動く。声にならずにその人の名前を形取る。

はやと

ゆっくりと自分に近づいてくる天使が、にっこりと微笑んだその瞬間、アキの意識はブラックアウトした。

それはアキが大好きな恋人の、大好きな表情だった。

「あ、アキちゃんが起きたよ」

目覚めたとき、アキが見たのは弟のフユの顔だった。

ぼんやりした頭で思う。さっき隼人の夢を見た気がする。白い翼を生やした隼人の姿に、ああ、隼人は天国で天使になったんだ、と思った。自分に向かって微笑んでくれた。

幸せな気分でゆっくりと体を起こしたアキは、自分を取り囲む家族の中の、ひとり異質な存在に目をみはった。

「あ、アキが固まった」

ナツの顔つきは面白がっているときのソレだ。

「お前だってさっき固まっただろうが!」

ナツに軽くデコピンをお見舞いし、ハルが頭をぐしゃぐしゃと掻きながら言う。

「……まあ、俺も縁側でアキを抱きかかえてる天使を見たときは、さすがにびびったが」

「ハルちゃんが大声で叫んだから、ぼくびっくりして起きたんだよ! お父さんも慌てて起きたんだよね?」

アキを覗き込んでいたフユは、笑いながら父親を見た。

「早朝から騒々しすぎる……。誰のせいかってハルのせいだけどな」
無精ひげを生やしたままの寝起き顔で、あくびをしながら栄は眠
そうに呟く。

「あはは、ハルさんのせいっていうより、元はといえば僕のせいな
んで。すみません、おじさん」

会話の流れにすんなりと入り込んだ天使……。もとい隼人になんの
違和感もない。更に言うなら、一切の動揺を見せずすでに馴染ん
でいる自分の家族に、アキは驚きを通り越して呆れた。

隼人は死んだ。間違いなく。

それは曲げようのない事実であり、認めなければならぬ現実の
はずだ。それなのになぜ、隼人はここにいるのだ？ 背中に翼を背
負い、まるで天使そのものになっているが、その顔も体も、声も、
なにもかもが自分の知っている隼人なのだ。

心が、痛い。

なぜ今、こんな形で隼人が目の前にいるのか、理解できない。目
の前の“隼人の姿をした天使”を直視できずに、アキは俯いた。
そんなアキの様子を見て、ハルは隼人に向かって言った。

「……そろそろ、話してくれるか？ 一体どういうことなのか」

「はい、では、アキも目を覚ましたところで、説明させていただきますね」

その場に集まった五人を見回した隼人は、きちんと正座をして、にっこりと笑顔を浮かべて言った。

「アキ」

名前を呼ばれたアキは、ぴくりと肩を動かした。

「ごめんね、死んだのにこうして現れて」

その言葉にがばつと顔を上げたアキは、動揺を隠せない瞳を彷徨わせ、そして首を振った。そんなアキの様子に、隼人は少し目を細めて、口を開いた。

「僕は確かに死んでいます。みなさんが見送ってくれたあのときに」

日向家の五人は一斉に顔を曇らせた。葬式の時の悲しい想いが脳裏によみがえる。

「死んだあと、僕の魂は、天国へ向かいました。というか、僕の都合交通事故だったので、死んだとか良く分からないまま、気がついたら白くて大きな門の前にいたわけなんです」

通夜の時の暗い雰囲気を出した一瞬前の自分たちがバカみたいな、あっけらかんとした隼人の物言いに、一同は啞然とする。まるで現実味のない話の内容以上に、にこやかに話す隼人の態度は不自然なほど明るい。フユだけは話を理解できているのかいないのか、にこにこしていたが。

「その門をくぐると、そこはまあ、いわゆる天国で、死んだ人たちの魂が暮らしていました。僕は祖父母に再会しまして、しばらくは一緒に天国で暮らしました。祖父母に会ったことで、自分が死んだという事実を再確認したんですけどね。自分の葬式の様子も見ちゃいました。みんながあんまり泣くんで、それで僕ももらい泣きしちゃって」

苦笑しつつ頭を掻く隼人に、誰一人声をかけられるものはいない。呆気を取られて口を開いたままのギャラリを意に介さず、隼人は話し始めた。

天国で暮らし始めてからしばらく経った頃、隼人のもとにひとりの正天使せいてんしがやってきた。

通常、いわゆる“亡くなった人”は>天国<と呼ばれる世界に存在し、そこで暮らしている。天国とは、そこに存在する住人たちが一度その命を終えたものたちが、次の生を受けるまでその魂を癒す場所として創生の神が創った場所であり、住人たちはいずれ訪れる転生の時を“待つ”ことだけを目的とし、存在している。

よく物語に登場する、いわゆる神や天使などという存在はそこにはいない。神やら天使やらが存在するのは>天界てんがい<と呼ばれる場所で、>天国<とはまた違った世界であり、天国の住人がそれらの存在に遭遇することは滅多にない。

その滅多に会うはずのない存在が、隼人のもとへやってきた。翼を持った人型をとる“正天使”は、神の仕事を補佐する為に働いて

いるというだけあって神々しいオーラを纏い、隼人にある誘いを持ちかけた。それは 天使になる誘い、だった。

いわく、隼人のように若くして死んだものは、生きているうちに経験できなかった“仕事”を体験できるよう、“準天使”じゅんてんしとして力を与えられ、神や正天使の下で働くことができるのだという。

あれこれあってその誘いを受けた隼人は、仮初めながらも天使としての力を得、神や天使たちの住む天界へと渡り、天候を司る神の元へ配属された。隼人の直属の神様は、雲を司る通称“雲くもじい”と呼ばれる、ちいさくてよぼよぼの爺さんであった。

なにはともあれ、雲じいの下で働き始めた隼人は、他の準天使や正天使とともに、雲に関する仕事をするようになったのであった。

「雲じいってちっちゃくって可愛いんだよ。頭なんかふわふわの白髪でさ。羊みたいなの。ひげもふわふわで……」

自分の上司であるおじいちゃん神様に思考を飛ばして遠い眼をした隼人に、ナツは割って入った。

「ちよ、ちよと待て、隼人。雲じいはわかったけど、雲に関する仕事って何なの？ それと今の隼人と何か関係あるの？」

的を射た質問に、隼人は瞬きをして、またにっこり笑った。

「あ、ごめんね。つい……。えっと、雲じいと僕たちのやってる仕事って言うのは、雲を“描く”ことなんだ」

「……描く？」

「自然発生ではなくて？」

ナツとハルはそれぞれに疑問を口にした。アキと栄は黙ったまま、フユはにこにこしたままだ。

「うん、もちろん大部分は自然発生なんだけど、時々必要に応じて雲を作り出すんだよ。僕はよく知らないけど、神様会議で決めてるみたいなんだ。」

一旦言葉を区切って一同を見渡し、またしても口をぽかんと開けた三人を見遣って苦笑する。

「雲じいが雲を描いて、その雲から雨じいが雨を降らすんだ。雨を降らさない雲もあるんだけどね。それから描かれた雲は、風ばあが適当に吹き散らすって寸法なんだ」

「ちょ、ちょっと待て」

頭脳派のナツが、またも懸命にストップをかける。

「お前“描く”って言ったよな？ 絵みたいに雲を描くと、そこから雨が降るのか？ 一体どうやって？ でもって結局お前の役割は？」

眉をしかめつつ矢継ぎ早に質問したナツに、隼人はその答えを用意していた。

「これを使うんだ」

詰襟のようなチャイナ服のようなデザイン、丈の長い上着のポケットから、おもむろに取り出したのは、蓋付きの缶のようなものだった。

「>神様の絵の具くって呼ばれてる」

その缶の蓋を開けると、絵の具とは言い難い、首を傾げたくなくなるような無色透明の液体が入っていた。

「絵筆は、僕らの指。描きたい雲を頭の中に浮かべて絵の具をつけて、それを空に走らせるだけ。そうすると雲ができて、あとは雨が降ったり風に散ったり。簡単でしょ？」

一同は、缶の中身を覗きこみ、そして一様に言葉を失った。……ちよつと理解の及ぶ範疇ではない。そんな日向家の面々を見渡し、隼人は少し嬉しそうに言った。

「僕は元々なりたての準天使だし、地上に降りてくる予定はなかったんだ。でも雲じいが、急にぎっくり腰になっちゃって。動けなくなっちゃった雲じいの仕事の穴を埋めるために、僕たち天使がそれぞれ地上に派遣されて、仕事することになったんだ。これが僕がここに来た理由。」

笑顔を更に深めてにつこりと笑った隼人は、そうやって話を締め括った。

とりあえず隼人の一連の説明を聞き、今の状況と、隼人がここに来た理由は分かった。……分かったが……、内容があまりにファン

タジーだ。

絶句したままのアキを横目に、一番早くこの状況に適応したのは、ナツだった。

「うーん、まあ、そっか。いろいろ信じがたいことも多いけど、それより俺は、お前とまた会えて嬉しいよ。元気そうだし、安心した。もう、それでいいよ」

苦笑いのため息とともに言い切ったナツに、隼人も口元をゆがめる。もともとふたりは、高校のクラスメイトで、アキと隼人が付き合いだす前からの親友だ。その辺の気安い関係がふたりにはある。

普段は現実的なことばかりを口にして、ちよつと空想癖のあるアキを窘めるナツが、いち早くこの状況を受け入れたことに、アキは内心で驚いていた。それとともに、すんなり受け入れることの出来ない自分に、戸惑っていた。

失ってからもずっと心の中に想い続けてきた人だ。奇跡のように再び逢えたのに、なぜ素直に喜べないのだろうか？

……コワイ

怖い？ 一瞬心の中をよぎった言葉に、アキは首を傾げて自分の心に問いかけた。

怖い、何が？ 死んだ人とは言え透けてる幽霊でもないし、他でもない隼人なのだ、怖いことなど何もないはずなのに。

アキが悶々としているあいだに、長兄のハルも心の整理を付けたようだ。

「まあ、小難しいことはいいや。こうして目の前にいること、それが全てだよな。隼人」

弟の親友として、その後妹の恋人として日向家にしょっちゅう出入りしていた隼人は、ハルにとって三人目の弟のようなものだ。流石にアキと付き合いだしたときはぶん殴ってやろうと思ったが、アキの幸せそうな顔を見て踏みとどまったことは、ナツにも隼人にも筒抜けであった。

そんなこんなで結局仲良くなった、血のつながらない弟のような存在の隼人の肩に手を置いたハルがにこにこ笑うのを、アキは呆然とみつめる。

なんで

私は

呼吸すら忘れたかのように、目を見開いたまま固まってしまったアキに、隼人は優しく声をかけた。

「アキ」

はつと顔を上げたアキに向けられた微笑は、ひどく優しくかった。

「無理……しなくていいからね。ごめんね、混乱させちゃって。でもね」

一旦言葉を止め、目線を落とした隼人は、再び顔を上げ、笑みを更に深くして告げた。

「僕は、またアキに逢えてうれしいんだ。……雲じいに感謝しなくっちゃ」

それは、アキの大好きな。大好きな隼人の大好きな笑顔で。

失ってしまったって、二度と目にすることは出来ないはずの、大切な。

胸が詰まって苦しくて、声が出せそうにない。代わりに目からは涙がぼろぼろ落ちてどうにもならない。

逢いたかった逢いたかった逢いたかった。

私も、逢いたかった、隼人。

その気持ちをぶつけるように、アキは隼人に抱きついた。悶々と考え続けていた思考の塊はどこかへ投げ打って。

いつかぎゅっと抱きしめあった時のように、隼人も抱きしめ返してくれた。かすかに香る隼人の匂いに安心して更に擦り寄る。

だが隼人が苦笑して、アキの髪を撫でたとき、アキはぴくりと身を震わせた。

隼人に抱きついたアキを見たナツは、ほっとした笑いを浮かべながら大きく伸びをして、少し寝癖のついた髪を梳きながら言った。

「さーってと、落ち着いたところで、朝飯でも作りますかあ。父さん今日仕事だろ？　すぐ準備するから！」

そのナツの言葉に、栄は「ああ、そうだった」と洗面所のほうへ歩き出し、ハルも抱き合うふたりを少しだけ複雑そうな表情で見遣って肩をすくめ、フユを促してその場を去った。

こうしてひとまずその場はお開きになり、一同は散会した。

ただ、アキと隼人だけはその場から動かず、じっとしていた。自身の腕の中に納まったアキが、固く体を強張らせたのを、隼人はわかっていながらもそのまま抱きしめ続けた。愛おしそうに髪を撫で、

離れていた時間を埋めるようにしっかりと強く。

だがそんな隼人の顔に、幸せとは程遠い苦悶の表情が浮かんでいることを誰も知らなかった。腕の中のアキだけがただならぬ気配を察し、沈黙が流れるのをやり過ぎすかのようにじつと息を潜めていた。

じゅわーという音と共に、卵のいい匂いが台所に立ち込める。

よくこの短時間でと自分でも驚愕するほどに立派な朝ごはんが出来上がり、ナツは鼻歌を歌いながら居間に運ぶ。

「おーい、みんな、朝飯できたぞ〜」

と、上機嫌で呼ぶと、お腹を空かせていたのかフユが一番に跳んできた。焼き魚、茹でたウインナー、玉子焼き、温野菜に漬物……と、テーブルに並べられたおかず、大きな瞳を輝かせる。

「わあい、ナツちゃんの玉子焼きだ！ ぼく大好き！」

そんなフユにナツは破顔して答える。

「玉子焼きくらいでそんな喜ばれるとなく。はははっ。……ところであキと隼人は？」

一転、真面目な表情に戻って尋ねたナツの疑問に答えたのは、フユではなかった。

「ああ、ナツ、相変わらず料理上手だね。おいしそう」

障子の向こうからひょいっと首を出したのは、他でもない隼人で、その後ろにあキもいた。

「隼人、お前も食うだろ？ 久々のナツ様の手料理をご堪能あれってやつだな！ たいしたもんじゃないけど。アキ、お前もそんなとこにいないで、早く座れよ」

嬉しそうなナツの言葉に、隼人は、複雑な表情で返した。

「ああ、ごめん、ナツ……。僕は食べられないんだ。せつかくだけど、残念だな」

苦笑いを顔に浮かべた隼人に、ひげを剃ったばかりのほおを撫でながらやってきたハルは不思議そうに問う。

「……？ なんでだ？ お前食わなくて動けんのか？ はっ、まさか、天使は霞を食うとか！ 仙人みたいに！」

自分で勝手に答えを探し興奮するハルを横に、隼人はひどく落ち着いた声で話す。

「うーん、ハルさん。仙人の食生活は知らないけど、天使はね、基本的に食事は摂るけど天界の食べ物しか食べられないんだ」

優しいな声音でそういった隼人に、ナツは首をかしげた。

「なんでだ？ まさか地上の食べ物汚れてて食べられないとか、そーゆー理由か？」

隼人は「ううん」と首を横に振る。

「違うよ、そうじゃない。もっと、別の理由。……触れられないんだ、天界の住人は。……地上のものには」

そして自身の手をみつめ、一瞬にして固い表情になった隼人に、
ナツもハルも思わず真剣な表情になる。

「死んだ人や天使はね、実体を持たないんだ。……よく考えたらそうだよ。体は死んだときに焼かれちゃってるんだもの。魂って言われるものが、記憶や想いを留めて、そして天国でその意識を取り戻す……そういうことだと思うんだけど。だからね、体のない僕たちは、たとえ地上に降りてこられたとしても、触れることはできないんだ。何にも。だから食えることだつてできない」

「だ、だけだよ……、お前、今、体あるじゃねーか。それってどーいうことだ？」

どもりながらも、もつともな疑問を口にしたハルに、隼人は端正な表情を崩さずに言った。

「ほら、僕って仕事しにきたでしょう？ だから今回は特別に、肉体を貸してもらってるんだ。……“天使の器”^{てんし うつわ}って呼ばれてる。要するに人形みたいなものなんだ。そこに魂が一時的に融合して、その人が生きてたときの体になる。でも、あくまで器だから、本物じゃないんだ」

隼人の背後で、黙って説明を聞いていたアキは少しだけびくつと身を震わせ、先ほどから青くなっていた顔を更に蒼白にした。そんなアキに隼人は少しだけ振り向き、すまなそうに笑った。

「アキはもう気付いたよね。……僕の手、冷たいから。体だつて冷たいもんね。血が通ってないんだもの」

そうして再び自身の手を見つめた隼人は、自分を取り囲むようにして黙ってしまった日向家の四兄弟に気付き、その空気を吹き飛ばそうとするように殊更明るく言った。

「もう、みんなったら。僕が死んだ人間だつてとつくにわかってるでしょ。ほら、さつさとご飯食べなきゃ。フユくんはお腹空いてるんじゃないかった？ あ、あとそこにいるおじさんも！ 仕事遅れますよー！」

その瞬間、くるくと鳴ったお腹の音にフユは赤面し、ハルとナツは吹き出した。廊下の影からのそりと顔を出した栄は、少しバツの悪そうな顔をしつつも、食卓についた。

笑いながらナツは味噌汁を取りに台所へ引つ込み、ハルはフユを促して食卓につき、ご飯をよそべくしゃもじを取った。

全員が何事もなかったかのように振舞う中、アキだけがやはり、その場から動けずにいた。

「アキ、ほら、ご飯だよ。ちゃんと食べなきゃね」

隼人はそんなアキに優しく声をかけ、アキの背中に腕をまわす。ふわりと微かに感じた匂いに、アキは思わず声を出した。

「……じゃあ匂いは」

驚きのかたちに目を見開いた隼人に、アキは気色ばんで続ける。

「体が、隼人のじゃないなら、じゃあどうして」

どうして、隼人の匂いがするの？ 匂いは体から発せられるもの

でしょう？

その先の言葉を口を押さえて噤んだアキは、隼人から視線を逸らし、家族に向かって必死になって言い繕った。

「ごめん、みんな。ご飯食べよっ」

そうしてそのまま食卓についたアキに集中していた視線は、ぎこちなくも逸らされ、一瞬の喧騒に乱された食卓の気配は、その場の人たちの努力によって、見た目穏やかなものへと変わっていった。

隼人はご飯を食べだしたアキを静かに見守って、自分は居間の隅に腰を下ろした。

むぐむぐとナツの作ってくれた朝ごはんを咀嚼しながら、アキは必死で自分の中の感情と闘っていた。

聞いちゃダメだ。だめ。

体が人形なのに、隼人の匂いがするはずない。きつと自分が作り出した幻覚ならぬ幻臭なんだ。だけど……。

ごくり、と甘い玉子焼きを飲み下し、アキはちらりと隼人を盗み見た。隼人はその視線に気付き、にっこり笑う。あわててご飯に視線を戻す。

……聞きたくなかった。『匂い？ 気のせいだよ』なんて。

そうしてきつと悲しそうに微笑むだろう隼人を見たくはなかった。

自分の嫌な想像で頭をいっぱいにしながら、アキは必死で箸を動

かし続けた。……久しぶりに量を食べたご飯が、ほんの少しの後に
すべりもどされてしまうのも知らずに。

朝ごはんを素晴らしいスピードで胃に収めた父、栄は、仕事に出掛けるべく玄関の上がり框かまちに座り込み、足袋たびを履き始めた。頭にはねじったタオルを巻きつけ、耳に鉛筆を一本挟んでいる。栄の職業は大工であり、代々続く工務店の跡継ぎになる予定だ。

四十台も半ばを過ぎた年になって未だ“予定”なのは、ひとえに彼の父親、つまり四兄弟の祖父が、七十近くになってもバリバリの現役で、元気いっぱい現場を仕切っているからだ。自分が動けなくなるまで家督を譲る気はないらしい。そのことに関して栄は、父の気のすむようにと考え、傍らで静かに見守る姿勢を貫いていた。栄はもとも無口で物静かな性格で、その真面目で実直な仕事ぶりを、工務店に勤めるほかの大工や職人たちも評価しており、性格の全然似ていない親子二代のかみ合わない漫才を、現場での隠れた楽しみとしている。

「じゃあ、行って来る。帰りは……六時くらいだろう」

長年愛用している、履き慣れた足袋を履いた栄は、玄関まで見送りに来たハルに声をかけた。

「わかった。ほい、これ弁当」

朝ごはんの残りやらを詰めてナツが作った弁当を渡す。夏だからご飯に梅干は必須だ。兄弟たちは祖父に連れられて現場に遊びに行くことも多かったから、建築現場が暑いことなど百も承知である。

猛暑日になるのがわかっているときなどは、弁当箱ごとクーラーボックスに入れて持たせるのだ。

息子がいつも気を使ってくれる、たっぷり量の入った弁当を受け取り、普段ほとんど動かない表情筋を少し緩ませた栄は、そういえば、とハルに尋ねた。

「アキは、大丈夫か？ 寝かせたのか？」

「ああ、うん。寝かせたよ。ここんとこあんま食べてなかったのに、急にたくさん食べ過ぎて胃が受け付けなかったんだと思う。だから多分大丈夫」

「……隼人は？」

「アキに付き添ってるよ」

「……そうか。……行って来る。後頼むな」

栄は自分に似て体格のいい長男と、声を落としてそんなやりとりを交わした後、玄関から出て行った。すぐに軽トラックのエンジン音が聞こえ、角を曲がって聞こえなくなった。

ハルは玄関先でふうとひと息を吐くと、おもむろに二階を見上げた。視線の先は、アキの部屋であったが、そこに向かうでもなく、頭をがしがしと掻きながら、風呂場に向かい掃除を始めた。

カーテンを引き、空調をかけて温度を調節した部屋で、アキは眠りについていた。ベッドの傍らの床に座り込んだ隼人は、アキの寝顔を眺めていた。

だいぶ痩せこけてしまったアキの頬を撫でる。眠れぬ夜を幾度も過ごしてきたことを隼人は知っていて、痛々しい隈と泣き腫らして慢性的に赤くなってしまった目元にそつと触れた。

自分を想って、こうまで思いつめてしまったアキに、隼人は複雑な思いだった。嬉しい反面、申し訳なくてどんな顔をしていいのかわからない。

「……出会ってから一年半、か」

そうポツリと零した隼人は、アキと出会ったその日のことを思い出していた。

一番最初の印象は、大人っぽい子だな、というものだった。

高校に入学した隼人は、クラスメートの中でひとり、少し変わった雰囲気を持つナツに興味を持った。進学校とはいえ男子校ならではのうるささの中、机に向かって黙々と本を読む姿は、ひどく大人びて見えた。隼人は知らなかったが、元々ナツは切れ長の涼やかな目もと、少し明るめのさらさらな髪で、近隣の高校生の間で噂になっているほどの美少年だった。

隼人は隼人でそのおっとりとしたやさしい雰囲気と、真面目な態度でクラスから一目置かれており、二人が周囲の喧騒から紛れ、仲良くなるのに時間はかからなかった。

いつものように話しながら歩く帰り道。下校途中の学生がバラバラと帰っていく中、ナツは前を歩くセーラー服の女の子に声を掛けた。

「アキ！ アキも今帰りか？」

その声にくるりと振り向いたのは、近くの女子高の制服を着た、おっとりとしたおやかな雰囲気の子だった。高くもなく低くもない身長、緩くウェーブした黒髪は肩口で緩く結われ、長いまつげに覆われた大きな瞳が印象的だった。

「あれ、ナツだ。珍しいね、帰りに会うなんて」

そう言うてにつこり笑ったその顔に一目惚れしたことは、ナツにすら言っていないちよつと恥ずかしい思い出だ。

「えっと……ナツ？ お知り合い？」

まさかナツの彼女じゃないかと隼人は内心びくびくしながら尋ねた。

「うん、双子の妹のアキ。おっちょこちよいがトレードマークだぞ」

笑顔全開で言われた『妹』という言葉にほっとしながら、目の前の美少女を見つめた。そう言われてみると鼻筋や全体的な顔の感じがナツに似ているが……おっちょこちよい？

「アキ、こっちは俺の友達、隼人だ」

「あ、僕、よしかわはやち吉川隼人です。よろしく」

紹介されてそっけない自己紹介をした。高校一年の春なんて、自己紹介ラツシュだ。もう反射反応とっていい。

「はじめまして、兄がお世話になってます。日向アキひなたです。よろしくお願いします」

にっこりと丁寧な挨拶に、慌ててお辞儀をした。もう勝手に恋に落ちてしまっていて、かわいいかわいいと叫ぶ心臓を上から手で押さえる。

どきまぎする隼人をそのままに、自己紹介完了とばかりに、「それじゃ三人で帰るか」と、マイペースなナツが歩き出した。アキも当たり前のように方向転換して歩き出す、その一步を踏み出したときだった。

「きゃあ!」

という悲鳴に、隼人はとっさに手を伸ばす。何故か何もなかった。ろでバランスを崩したアキの腰を隼人が引き寄せ、転倒は免れた。一瞬の出来事、中途半端に密着した体制のまま固まったふたりに、ナツは呆れた声音で頭をガシガシ掻いて言った。

「……おつちよこちよい発動。隼人、サンキューな」

「あの……、ありがとうございます。恥ずかしいです、会ったばかりなのに」

真っ赤に染まったアキの顔を見て、隼人は慌ててアキを解放する。落ちているアキの鞆を拾い、持たせてやる。

「うっん、気にしないで。よかった、転ばなくて」

隼人はにっこりと余裕の笑顔を浮かべつつ、何食わぬ顔で三人一緒に家路についた。だが隼人の頭の中は、一目惚れした恋心に戸惑う気持ちと、先ほどアキに触れた時の柔らかい感触とが緋い交ぜになり、その日どうやって家まで辿り着いたのか、全く覚えていなかった。

いつの間にかアキの大きな黒い瞳が、隼人の顔を見つめていた。一瞬トリップしていた頭を振って、隼人は平静を装って呼びかける。

「アキ？ 起きたの？ 気分はどう？」

アキはその赤みの引いた唇をゆっくり開いた。

「……初めてあったときの夢、見てた……」

その言葉に隼人は目を瞬かせる。

「わたし、あの時、隼人を好きになったの……。笑顔が、素敵で……」

言いながらも目線を彷徨わせた瞳は、瞼の裏に隠れ、薄く開かれたままの唇は寝息を立て始めた。どうやらまだ夢の中にいたようだ。

隼人はふつと笑って再びアキの頬を撫でた。隼人の妄想が飛び火したのか、はたまたアキの夢を共有したのか……。どちらにせよ、同じタイピングで同じことを考えるなんて、滅多にないことだ。絆の深さだろうか、などと考えて、隼人は直後に頭を振った。

目を閉じてふーと息を吐いた隼人は、何かを断ち切るかのように頭を振って素早く立ち上がり、そしてアキの部屋を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8097z/>

神様の絵の具

2011年12月29日09時50分発行